

## 戦場カメラマンに寄せて

鴨志田穰さんとその著書『アジアパー伝』を紹介されて知ったのは、もう7、8年前のことになるのか。その不思議と人を引きつける文体と西原理恵子さんの毒のあるマンガにはまってしまって、仕事そっちのけで、連作を一気に読んだものであった。

その鴨志田さんが、少し前に亡くなった。鴨志田さんを戦場カメラマンとだけ呼んでしまうのは正しくないのだが、彼の人生の時間ではなく重みにおいて彼をそう呼んでもよいと思う。イラクで兇弾に斃れた橋田さんの弟子で、アジアを中心に世界の紛争地域を疾走した。何を求めて疾走したのか。いや求めることが目的ではなく、疾走すること自体が目的だったに違いない。居ても立ってもいられない、自分では抑えることのできない意志の衝動。ノマドの生態、越境する精神、浮遊する身体テキスト、いろんな気どった形容が可能だけれど、手垢の付いた表現で、考える前に動いていしまう人というのが最も言い当てている。

さて新しい国際文化学科は、国際的な(intercultural)視点に立った文化理解力や言語コミュニケーション能力、それに基づく行動力など、地域の国際化（学生をはじめとする地域の人々が多様な価値観や視点の存在を理解すること）に対応する実践的な知識・能力を備えた人材の育成を目指して、カリキュラムが設計された。その設計に携わらせていただいたひとりとして、巣立ってゆく人材の極北の行動力として鴨志田さんのことが頭にあった。もちろん人材には動く前に考える力を身につけてほしいし、彼等をむやみに危険地帯に送り込むことを教育目標とするのでもない。しかし鴨志田さんの行動力の根底にあるような情念、そこまでいかなくとも行動せずにはおられないようなワクワクする気持ち、そのようなものを私たちが学生から引き出すことができれば、そうした人材が一人でも多く出つづけるならば、新しい学科は成功であると私は考えている。

### 【追記】

鴨志田穰さんと西原理恵子さんについては、私以上にはまっている方が、教員（差し障りがあるといけないのでイニシャルでI.T先生とだけ紹介しておく）におられるので、興味のある方には見当をつけてお訪ね下さい。時の過ぎるのを忘れて、熱く熱く語っていただけること、保証いたします。